

句集

展翅板

林 ゆみ



本阿弥書店

句集

展翅板

林 ゆみ



本阿弥書店

著者略歴

林 ゆみ (はやし ゆみ)

昭和29年(1954年)新潟県生まれ

平成14年「握手」磯貝碧蹄館に師事

平成22年「握手」第30回「新人賞」受賞

平成25年「遊牧」同人。

現代俳句協会会員。

千葉県俳句作家協会会員。

現住所 〒270-0022 千葉県松戸市栗ヶ沢 775-39

句集 展翅板

2015年9月22日 発行

定 価：本体2800円(税別)

著 者 林 ゆみ

発行者 本阿弥秀雄

発行所 本阿弥書店

東京都千代田区猿樂町2-1-8 三恵ビル 〒101-0064

電話 03(3294)7068代 振替 00100-5-164430

印刷・製本 三和印刷

©Hayashi Yumi 2015 ISBN978-4-7768-1195-4 (2914)

句集 展翅板*目次

序に代えて——手摺みの感性の愉しさ	塩野谷 仁	1
I 木の実	二〇〇二年～二〇〇五年	11
II 蠟 涙	二〇〇六年～二〇〇七年	33
III 触 手	二〇〇八年～二〇〇九年	63
IV かもめ	二〇一〇年～二〇一一年	99
V 片 手	二〇一二年～二〇一三年	137
VI 水 鏡	二〇一四年～二〇一五年	175

あとがき 210

序に代えて

——手摺みの感性の愉しさ

塩野谷 仁

林ゆみさんの第一句集『展翅板』の刊行を先ず喜びたい。仄間によれば、還暦を機に、長年勤め上げた千葉県松戸市立保育所の保育士の職を辞し（その後再雇用で保育士勤務）、そのお祝いを兼ねて句集の上木を思い立ったという。二重の喜びと推察したい。思えば、初見以来、林さんには天性の明るさがあると常日頃思ってきた。それは、長期間の職場での慣習などではなくて、生来の明るい性格ゆえのものと思われる。とにもかくにも明るいのだ。いつもの句会後の宴席などではテキパキと物事を捌いていく。実に手際がいい。だから、その闊達な性格が作品に反映されない筈はないと日頃から思い込んできた。そんな思いを込めて、先ず初期の作品から見えていきたい。

餅花や幼き頃の父と母
木の実落つやさしき嘘のふたつみつ
春昼やペンギンの見る人の群
手触りは和紙の強さよけしの花
足の爪より春愁の忍び入る

林さんの句作のはじめは平成十四年頃と聞く。同時に磯貝碧蹄館主宰の「握手」に所属したようだ。今回の句集では自選が厳しく、初期の作品がそれほど多くはない。その中からアトランダムに好みの数句を抽いた。その上で思うことは、ここには俳句への純真の目があるということだ。俳句という形式が身に合うのだろう。一句目は従来の手法そのままだが、二句目の「嘘のふたつみつ」には碧蹄館から教えられたという「虚の世界」への萌芽がある。言葉の捉え方に感覚の鋭さが見える。三句目の「ペンギンの見る人の群」には逆転の発想が早くも見え隠れし、五句目の、「春愁」が「足の爪より忍び入る」との捉え方には感覚の冴えが感じられる。そうなのだ、林さんにはもともと感性が備

わつていたのだ。それは天性の明るさと無縁ではあるまい。手摺みの天性の感性、それも生来に持ち合せていたものに違いない。

水澄むや高層ビルの窓硝子
愛されず轍の乾く冬野かな
流星や私をどこか連れてって
風花や馬の眼に映るもの
港湾に冬かもめ啼き五欲湧く
卵黄の被膜にひかり春きざす
足首から木に変わりゆく緑夜かな

集中より注目の数句を挙げた。先に、林さんには天性の感性が備わっているのではないかと書いたが、ここにきてその一端が実を結んできたように思われる。一句目。「高層ビルの窓硝子」に「水澄む」という季感を感じるのとは非凡なる目。二句目の「愛されず」の作品では、「冬野」において「愛されず」と

いう自己凝視の姿勢は、やはり感覚の冴えのなせる業。そして、その弛まぬ作業が、平成二十二年の第三十回「握手新人賞」に結実していく。ここでは、その作品群のなかから、「流星や」以下の好みの五句を抽出した。「流星や」の句では「私をどこか連れてって」に生来の明るさがあり、最後尾の句の「緑夜」に「足首から木に変わりゆく」には、持ち合せた感性の一つの開花が感じられる。当然の受賞といえよう。

霾ぐもり片手はいつも空けており
鳥渡るころの土へ線を引く
はだら雪わたくしの展翅板かも
石舞台光るものみな夏の目か
空席にきつと来るだろ金魚なら
色変えぬ松わたくしに水鏡
車窓過ぐ麦秋という忘れ物

平成二十五年、師・碧蹄館逝去と、それに伴う「握手」の廃刊により「遊牧」に同人参加した。が、当時の作品を見る限り、その作句傾向はそのまま引き継がれているようだ。一句目は「遊牧」入会早々の句会で、話題を呼んだ作品。「片手はいつも空けており」に感性の鋭さが窺える。「こころの土へ線を引く」のも内面の衝動。三句目は表題作。「展翅板」に今後の世界への希求をみているのかも知れない。四句目は「遊牧創刊十五周年記念奈良吟行会」の折の作品で、「光るものみな夏の目か」の感受性に話題が集まった。五句目の「空席」の句。ここにきて実存へと迫る姿勢が明らかとなってきた。それ以後の作品にも見られるように、その句業に厚みが増してきた証拠でもある。それは「水鏡」も「忘れ物」も作者の心眼が捉えたものに違いないからだ。「虚の世界」といっても、実存に裏打ちされたものでなければ危ういのは万人周知のこと。そうでなければ根無し草に終つてしまう危険がどこかにある。実存に根ざしたものの、存在の哀しさに裏打ちされたもの、それを私は「叙情」と言い習わして大事にしているのだが、これらの作品にはその「叙情」が確と根付いてきているように思われる。今後の展開を大いに期待したい理由の一つでもある。

そして、近作一句。

蝸牛ポルトガルまで透けてゆく

ここには確かに「実」に立った「虚」の世界がある。この句の「ポルトガル」は想念の中にありながら、間違いなく作者の肉体が捉えた言葉でもあった。これからの展開が楽しみでもある。

そして何よりも林さんには若さがある。その意味でもこれからの作家と言えなくもない。今後の活躍を期待し、同時に皆さんのご声援を乞う所以でもある。

平成二十七年七月 七夕の日に

句集 展翅板*目次

序に代えて——手摺みの感性の愉しさ	塩野谷 仁	1
I 木の実	二〇〇二年～二〇〇五年	11
II 蠟 涙	二〇〇六年～二〇〇七年	33
III 触 手	二〇〇八年～二〇〇九年	63
IV かもめ	二〇一〇年～二〇一一年	99
V 片 手	二〇一二年～二〇一三年	137
VI 水 鏡	二〇一四年～二〇一五年	175
あとがき		210

装幀 コスギ・ヤエ

句集
展
翅
板

林
ゆ
み

I
木の
実

二〇〇二年～二〇〇五年

山並にこだま響くや蟻の道

麻酔より呼び醒まさるる百日紅